

## 園城寺公胤の地藏願文について

## 館 隆 志

## はじめに

園城寺公胤(一一四五～一二二六)は、平安末期から鎌倉前期に活躍した園城寺(三井寺)の僧侶であり、四天王寺権別当、園城寺別当、法勝寺別当、権僧正、園城寺長吏、正僧正、法務などの要職を歴任し、三講の証義を幾度も勤めるなどその時代に希有な活躍をした僧侶として知られている。また、後白河上皇(一一二七～一一九二)、後鳥羽上皇(一一八〇～一二三九)、あるいは源通親(一一四九～一二〇二)からの帰依を受けており、この時代を代表する僧侶の一人と言えよう<sup>(1)</sup>。

さらに、道元(一一〇〇～一二五三)に禅宗への参学と中国への留学を勧め、結果として道元は建仁寺の榮西(一一四一～一二一五)に参じ、後に中国に留学して曹洞宗の法脈を受け嗣ぐこととなる。道元は、帰朝後に曹洞宗の法脈をもって日本において禅を弘めたが、公胤は道元が入宋するきっかけを与えたのである。また、源実朝(一一九二～一二一九)を殺害し

た公暁(一二〇〇～一二一九)の師であることなどでも知られている。

一方、これらの伝とは別に、公胤の名前を知らしめているのは、浄土宗の法然(一一三三～一二二二)との関係性であり、法然の『選択集』に対して、『浄土決疑抄』を著して反論していることは広く知られている。明恵(一一七三～一二三二)が建暦二年(一二二二)に撰述した『摧邪輪』やその翌年に撰述した『摧邪輪莊嚴記』、あるいは定照が嘉禄二年(一二二六)に撰述した『彈選択』は、法然の往生後に『選択集』を批判したもののだが、『浄土決疑抄』は法然の活動中に反論した唯一の書物である。

『浄土決疑抄』は現存していないものの、鎌倉中期の高山寺の蔵書目録『高山寺聖教目録』に「浄土決疑抄三卷、三井公胤僧正抄<sup>(2)</sup>」と記されており、また、同じく鎌倉中期の図書目録『浄土依憑経論章疏目録』にも「浄土決疑抄三卷(公胤園城寺大式僧正<sup>(3)</sup>)」とある。『浄土依憑経論章疏目録』は、浄土

宗九品寺流の祖である長西（一一八四～一二六六）が編纂した蔵書の目録であるため『長西録』とも言うが、ここに「浄土決疑抄」と公胤の名が記されているのである。公胤の『浄土決疑抄』は、かつて実在していた書物と判断され、その執筆は史実とみて良いだろう。

問題なのは、『浄土決疑抄』執筆後、公胤がその立場を改めて法然に帰依したと一般的に知られていることである。古い時代の法然の伝記史料には『醍醐本』『源空聖人私日記』など、公胤の帰依を伝えるものはない。法然の往生後、公胤は法然が勢至菩薩の化身であるとする夢告を見ることになったことを、法然の伝記史料は伝えるのみである。

これによって、絵伝などでは、公胤は法然の四十九日の法要の導師を勤めることになったと伝えられているが、法然が往生した建暦二年（一一二二）一月二十五日から四十九日目にあたる三月十四日に、院最勝講における論義の証義を勤めていることが判明しており、<sup>(4)</sup>この伝については拙著にて疑義を呈することになった。また、公胤の晩年の記録からも、法然の専修念仏に帰依したとみられる記述は存しないのである。

はたして公胤には、法然の専修念仏や、専修念仏を基本とする阿弥陀信仰があったのであろうか。この点を公胤の地蔵信仰をもって考察してみたい。

## 公胤の地蔵願文

本論で紹介する「公胤地蔵願文」は、東寺観智院所蔵『地蔵菩薩靈驗絵詞』（観智院本）の末に記されるものである。観智院本は、奥書によれば、享徳二年（一四五三）に比叡山の頼教が、仏花林所蔵の絵巻の絵を禅林房に写させ、頼教が仮名書きであった詞書を真字に改めた上で書き写したものがあり、これを文明十五年（一四八三）に両業末資継存が詞書のみを写し、さらにこれを延徳三年（一四九二）に権律師榮舜が書き写したものである。

観智院本は、享徳二年、文明十五年、延徳三年に書き写されるたびに書き加えられた記事が存し、延徳三年に権律師榮舜によって書き写された際の記事には、公胤が撰じた地蔵菩薩願文（これを「公胤地蔵願文」と名付ける）が記録されている。すでに真鍋広濟氏と梅津次郎氏によって翻刻紹介されているが、<sup>(5)</sup>ここに改めて翻刻紹介してみると、

三井長吏大式僧正公胤願文云、

唯願地蔵尊、臨終為現身、即随大士海、往生安樂国、雖罪障深重、雖功德淺薄、永為彼眷属、永為彼奴婢、設尚流転中、順次雖往生、雖為凡夫身、不離大士辺、行住坐臥時、常瞻仰尊顔、漸々蒙化道、終登大覺位、<sup>(6)</sup>文。

「訓」唯だ願わくは地蔵尊、臨終に現身と為り、即ち大士の海に随

## 園城寺公胤の地藏願文について（館）

い、安楽国に往生せん。罪障、深重なると雖も、功德浅薄なると雖も、永く彼の眷属と為り、永く彼の奴婢と為らん。設尚い流転中、順次往生すと雖も、凡夫の身に為ると雖も、大士の辺を離れず。行住坐臥の時、常に尊顔を瞻仰し、漸々に化道を蒙り、終いに大覺位に登らんことを。文。

とある。文末に「文」とあることから、これは全体ではなく、一部引用したものであることが知られる。

観智院本には、「公胤地藏願文」に続いて「地藏靈驗所」として、日本の計七十三ヶ所の地藏の靈驗所が記されている。このうち「近江」には、

宝地房（証眞法印願） 般若谷（々々） 千手井（々々） 三井（公胤僧正願、雲覚法橋作） 十禅寺 六度寺（山城云々） 円泰願、定朝作） 三井寺（正法院） 知見坊（横川） 蚊野村（愛智郡孫子庄、平諸道願ヤトリノ地藏云々）

と九ヶ所が記されている。そして、「三井（公胤僧正願、雲覚法橋作）」とあるのが、公胤が願文を撰じた地藏像のことと考えられる。すなわち、延徳三年の時点では、三井寺（園城寺）は地藏菩薩の靈驗所として知られ、その像は雲覚法橋の制作で、公胤が願文を撰じていたのである。

雲覚については、慶派の仏師である運覚ではないかと考えられる。建保二年（一二二四）四月十五日に焼失した園城寺の再建に、慶派の仏師が深く関わっていたとみられており、園

城寺と慶派仏師との繋がりを窺うことができよう。<sup>(8)</sup> また、公胤が別当職にあつたときの建保元年（一二二三）に再建された法勝寺九重塔についても、再建された御堂の仏像の仏師が運慶（？）<sup>(9)</sup> であり、公胤その人と慶派仏師との繋がりを窺うことができる。

運覚（雲覚）については、慶派の仏師ではあるが、これまでは、それほど名前が知られていたわけではなかった。建暦二年（一二二二）正月二十七日に造像された興福寺北円堂の弥勒如来坐像（国宝）の台座墨書銘に、源慶、静慶、運賀、運助、運覚、湛慶、康弁、慶運、康勝として慶派仏師が名を連ねている。その中に「法苑林 頭仏師 法橋運覚」とあり、現存の仏像では唯一この記録が知られているのみであった。

この他、『高山寺縁起』の中に、寛喜二年（一二三〇）に高山寺金堂に在った仏像が記されており、ここに、

四天王等身像各一軀（并各三尺侍者）  
持国天（円慶作、改名運覚）  
增長天（湛慶）  
広目天（康運、改名定慶）  
多聞天（康海、改名康勝）<sup>(10)</sup>

とあり、これによって高山寺金堂にかつて存した四天王像の持国天像は運覚によって制作され、また運覚はもと円慶と称していたことが知られる。さらに、この縁起の中で、

右本尊并四天王像者、本是洛城地藏十輪院（運慶建立堂）本尊也。而建保六年彼十輪院炎上畢、其後且怖<sub>レ</sub>洛中火難、且為<sub>二</sub>上人本尊<sub>一</sub>、運慶法印奉<sub>レ</sub>渡<sub>レ</sub>之（日記在<sub>レ</sub>別）、則為<sub>二</sub>西園寺入道大相国御沙汰<sub>一</sub>。去貞応二年四月八日、奉<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>安堂寺本堂<sub>一</sub>畢。凡此像、此運慶并弟子等、數年之間留<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>心所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>彫刻<sub>一</sub>也。

と記され、この四天王像が建保六年（一二二八）までに造像され、京都の地藏十輪院に安置されていたとある。地藏十輪院は運慶が開山した寺院で、これらの像は、運慶をはじめ弟子たちによって数年かけて造像された。そのうちの持国天像を運覚が造像したことになる。運覚は運慶の弟子の中でも有力な仏師であったとみられる。この他に、天福二年（一二三三）に伊豆修禅寺の金剛力士像を造立もしくは修理したことが知られている（『増訂豆州志稿』卷十之上）。

平成二十七年（二〇一五）三月十四日の中日新聞にて、静岡県浜松市岩水寺の木造地藏菩薩像（重文）の胎内から、由来を記した「運覚造像記」などが発見され、建保五年（一二二七）に運覚により六波羅蜜寺で造像されたことが判明したことがなどが紹介された。四月には、岩水寺の木造地藏菩薩立像像内納入品は、一括で重要文化財の新指定を受けたのである。

建暦二年（一二二二）に興福寺北円堂の弥勒如来坐像が造像された際に、「頭仏師 法橋運覚」とあり、建保五年（一二二七）七月七日に六波羅蜜寺にて岩水寺木造地藏菩薩像が造像され

園城寺公胤の地藏願文について（館）

た際には、「仏子法橋聖人位運覚」の名が記されている。運覚が造像した園城寺の地藏菩薩像の造像年時は不明であるが、興福寺北円堂の弥勒如来坐像と岩水寺の木造地藏菩薩立像と二つの事例と、高山寺持国天像の造像推定年時を踏まえる限り、建保二年園城寺焼失の再建に際して、新たに造像された可能性は高いのではなからうか。

この仏像については、現在確認することはできないが、少なくとも「地藏靈験所」が記された延徳三年頃には、地藏靈験所の仏像として園城寺に存していたことになる。公胤が願文を撰じた地藏菩薩像は、靈験あらたかな仏像として知られていたのである。平安後期から鎌倉時代にかけては、地藏信仰が盛んな時代であったが、園城寺においても地藏信仰が盛んであった点は注目すべきであろう。

この点、『沙石集』「愚痴の僧牛ニ成タル事」には、

三井寺ノ長吏、公胤僧正、幼少ノ時ヨリ、法器ノ人也ケレバ、（中略）御イノチ、七ニアマリテ、ノビテ見エ給ト、イヒケルニアハセテ、八十アマリニテ、地藏ノ引導ニヨリテ、目出往生セラレケル。頭ニ五色アラハレ、紫雲タナビキ、音楽キコヘナンドシテ、京都ノ人々オガミアヘリキ。

という記事が収録され、公胤が地藏の引導によって往生したことが記されており、公胤の地藏信仰が広く認識されていた可能性が示唆されている。

## 園城寺公胤の地藏願文について（館）

また、『石清水八幡宮文書目録』にも「第十八、公胤僧正地藏讚<sup>(13)</sup>」とあり、かつて公胤の地藏讚が、石清水八幡宮に所蔵されていたらしい。ここでいう「公胤僧正地藏讚」と「公胤地藏願文」は同一のものを指している可能性もあるが、園城寺、東寺、石清水八幡宮に公胤の地藏信仰に関する史料があつたことになろう。公胤の地藏信仰は、それなりに知られていたと判断してもよさそうである。

一方、法然の絵伝では、公胤が往生したことを記している。法然の絵伝の中における「往生」は、阿弥陀仏の導きによって極楽浄土に往生することを指している。したがって、法然の絵伝の中における公胤は、阿弥陀仏の導きで極楽浄土に往生したことになるが、『沙石集』では地藏の導きで往生したことになっている。「公胤地藏願文」や『沙石集』と、浄土宗系の史料には、公胤に関する異なる信仰が記載されていることになる。ただし、「公胤地藏願文」に「安楽国に往生せん」とある「安楽国」は、極楽浄土の別称であるから、導く仏菩薩は異なっているとしても、極楽浄土への往生を願文として記していたことになるだろう。

天台宗寺門派の公胤は、顕密僧であり諸仏への帰依があることはそもそも当然である。たとえば、『愛染王紹隆記』には、「大吉祥院僧正公胤者、寺門ノ人ナレトモ此尊本誓悲願勝給ヘルニヨリテ、後生菩提ノタメニ、長日行法シ修スルヨシ」

と記されている。『愛染王紹隆記』は「約四十名に及ぶ僧俗がその信仰による靈験を受けた事実が列記され」たものであるが、「そのほとんどが、高德名流の人たちであつて、特に慈円・公胤などを除いてはすべて東密系統の高僧<sup>(14)</sup>と指摘され、東密系の史料においても愛染王の靈験譚に公胤の名が収録されていることになる。

この点、公胤も建永二年（一二〇七）二月二十日から二十七日までの後鳥羽上皇の高野山御幸に随行し、二十七日に奥院で「御納経供養」で導師を勤めており、ここに東密との接点も確認できる（『高野山春秋編年輯録』巻七）。

当時の実力者の公胤であれば、そのような記録は他にもあつたであろう。また、法然の伝記史料以外には、阿弥陀信仰を示す記録は残っていないが、阿弥陀仏に対する信仰もあつたであろう。しかしながら、残っている史料でみれば、地藏信仰に関する史料は三点と他のものよりも多く、公胤に強い地藏信仰があつたということは可能であろう。

地藏菩薩は阿弥陀仏の脇士とすることもあり、その信仰形態は複雑な部分もある。しかしながら、『沙石集』巻一「浄土門ノ人神明ヲ軽テ罰ヲ蒙ル事」に、

中比、念仏門ノ弘通サカリタリケル時ハ、「余仏余教、皆イタヅラ物ナリ」トテ、或ハ法花経ヲ河ニ流シ、或ハ地藏ノ頭ニテ蓼スリナドシケリ。或里ニハ、隣家ノ事ヲ下女ノ中ニ語りテ、「隣ノ家ノ地

蔵ハ、既二目ノモトマデ、スリツブシタルゾヤ」トイヒケリ。浅間シカリケルシワザニコソ。或浄土宗ノ僧、地藏菩薩供養シケル時、阿弥陀仏ノソバニ立給ヘルヲ、便ナシトテトリヲロシテケリ。或人、「地藏信ゼン人ハ、地獄ニ落ベシ。地藏ハ地獄ニヲハスル故ニ」トイヒケリ。<sup>(15)</sup>

とあるように、鎌倉後期には浄土宗（浄土門）におけるこのような説話が伝えられていた。『沙石集』が記された時代、少なくとも浄土宗においては、地藏信仰と阿弥陀信仰は明確な区別があつたと理解されている。

一方、法然の伝記史料のうち『行状絵図』巻十二では、

左衛門の志藤原宗貞ならびに妻室惟宗の氏女、夫婦心をひとつにして堂舎建立の発願をなし、雲居寺の北ひむがしのつらに其地をしめ、建仁元年四月十九日に上棟、同二年春の比其功すでに終にけり。本掌は阿弥陀の像、脇士は観音・地藏を安置したてまつる。同年秋のころ、上人吉水の御房より、雲居寺の勝応弥陀院へ百日参詣し給しとき、願主宗貞門前に蹲居して、堂舎建立の旨趣をのべ、御供養あるべきよしをのぞみ申ければ、上人堂内に入給て、仏像安置の躰を御覧ぜられ、この堂は源空が供養すべき堂にあらずとて出られにけり。<sup>(16)</sup>

とあり、法然が地藏菩薩が奉られている堂について「供養すべき堂にあらず」として供養しなかつたという。その後、施主は地藏像を「異所」に移し、代わりに勢至菩薩像を安置し

園城寺公胤の地藏願文について（館）

た。そして、後に法然が「相違なく供養」したと伝えられており、法然の伝記史料においても地藏信仰と阿弥陀信仰は区別されているのである。ただし、法然その人が完全に地藏信仰を排斥していたわけではなかつたようである。<sup>(17)</sup>すなわち、『沙石集』や法然の伝記史料を踏まえるならば、公胤の地藏信仰は、法然の浄土宗の阿弥陀信仰と区別されるべきものと理解すべきであろう。

### おわりに

本論においては、観智院本に収録された「公胤地藏願文」を紹介した。「公胤地藏願文」は、公胤の地藏信仰を窺うことができるのみならず、平安末期から鎌倉初期にかけての地藏信仰に関する貴重な史料の一つと言えよう。また、慶派の仏師である運覚の新たな事跡として、園城寺再建の造像に関わつたとみられることも興味深い情報を伝えていよう。

一方、「公胤地藏願文」と『沙石集』などにみられる公胤の地藏信仰からは、法然の浄土宗、すなわち一向専修の念仏についての強い信仰があつたようにはみられないのである。すでに指摘している通り、公胤と法然の関係性は、あくまで『浄土決疑抄』の撰述と、その後法然に関する夢告を見たという点に止めておくべきと考える。

「公胤地藏願文」は、公胤と法然の係性を窺う上において

## 園城寺公胤の地蔵願文について(館)

も、極めて貴重な史料と言えるのではなからうか。

- 1 公胤について、法然、道元との関係については、拙著『園城寺公胤の研究』(春秋社、二〇一〇)を参照されたい。
- 2 『高山寺聖教目録』(『高山寺経蔵古目録』高山寺資料叢書第十四冊、一九八五、四二頁)。
- 3 『浄土依憑経論章疏目録』は、小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目録』」(『同朋大学論叢』第六十二号、一九九〇、一九七―三〇七頁)を参照。
- 4 『玉蘂』建暦二年三月十四日条(『玉蘂』思文閣出版、一九八四、一四〇頁)。
- 5 真鍋広済・梅津次郎編『地蔵靈験記絵詞集』(『古典文庫』一一八、古典文庫、一九五七)と『新修 日本絵巻物全集』第二十九卷(角川書店、一九八〇)に翻刻を収録する。
- 6 観智院本『地蔵菩薩靈験絵詞』(『新修 日本絵巻物全集』第二十九、角川書店、一九八〇、七六頁)。
- 7 観智院本『地蔵菩薩靈験絵詞』(『新修 日本絵巻物全集』第二十九、角川書店、一九八〇、七六頁)。
- 8 園城寺再建に関わった源氏や鎌倉幕府との関係から、園城寺再建に際しては、運慶や快慶などの慶派が造像を行なっていたと考えられている。史料や銘文などから明確になる作例は残されていないが、作風から慶派として考えられる事例が紹介されている(図録『三井寺仏像の美』大津市歴史博物館、二〇一四、四六頁)。
- 9 『明月記』建保元年四月二十六日条の、法勝寺九重塔再建の勸賞を記した記事に「湛慶〈運慶賞讃〉」(『明月記』卷二、国書刊行会、一九七〇、二六三頁)とある。

- 10 『高山寺縁起』(大日仏一一七・三〇一頁)。
  - 11 『高山寺縁起』(大日仏一一七・三〇一頁)。
  - 12 『沙石集』「愚痴ノ僧牛ニ成タル事」(渡邊綱也校注『沙石集』岩波書店、一九六六、三一六・四九六頁)。
  - 13 『石清水八幡宮文書目録』(『鎌倉遺文』古文書編第六卷、四四三〇号、東京堂出版、一九七四)。
  - 14 永井義憲「『愛染王紹隆記』——解説と翻刻——」(『大妻女子大学文学部紀要』二、一九七〇、九六頁)。
  - 15 『沙石集』卷一「浄土門ノ人神明ヲ軽テ罰ヲ蒙ル事」(渡邊綱也校注『沙石集』岩波書店、一九六六、八六―八七頁)。
  - 16 『行状絵図』第十三(井川定慶編『法然上人伝全集』増補再版、一九六七、五九頁)。
  - 17 清水邦彦「法然浄土教における地蔵誹謗」(『日本思想史学』二十五号、一九九三、四三―五四頁)。
- 〔補記〕本論は、本年が園城寺公胤の八〇〇年の遠忌に当たることから報恩のために執筆したものである。平成二十七年三月二日に本学会への発表の申込みをした後の三月十四日に、岩水寺の木造地蔵菩薩像の胎内納入品の発見が中日新聞で紹介された。ここに、調査中の運覚(雲覚)の記事があったことはまったくの偶然であったが、浜松市の岩水寺さまからご便宜を、文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官の奥健夫先生からご教授を頂戴した。仏縁に感謝申し上げます。

〈キーワード〉 運覚、法然、三井寺、『地蔵菩薩靈験絵詞』

(花園大学非常勤講師・仏教学博士)